

オーストラリア業界による水産庁及びOPREとの築地市場訪問（2014年7月4日）から得られたデータ

要旨

背景

オーストラリア畜養業界は、SBT活け込み時の重量サンプリング及び活け込みプロセス全体の視察のため、2014年2月10-12日、ポートリンカーンに日本政府、科学者及び業界及びその他全てのCCSBTのメンバーを招待した。また、オーストラリア畜養業界は、日本政府（水産庁）による毎月の築地市場調査への参加を認めるよう要請した。この訪問は、2014年7月3日の水産庁による説明の後、2014年7月4日に行われた。

目的

本文書では、訪問時に収集したデータ、当該データが及ぼし得る影響、及び状況を明確化するためのいくつかの勧告を提示している。オーストラリアが2009年にESCにおいて既に提起した指摘と類似している（CCSBT-ESC/0909/09を参照されたい）。

問題

市場から得られた情報は、ミナミマグロ（SBT）の漁獲量の水準に関する重要な二次的情報源である。2006年日本市場レビュー（JMR、CCSBT-ESC/0607/11）によって変化を引き起こした市場情報とはこれであった。

2008年から、日本が毎年CCSBTに提出している文書（2013年は除く）において、築地で競りにかけられる冷凍SBTの出所は、2006年JMRの推定からは大きく変化してきたことを示唆してきている。例えば日本は、輸入冷凍天然SBTが全ての競りにかけられる冷凍SBTに占める割合は、JMR時の5%から29.7%に増加したとしている。また、オーストラリアの冷凍畜養SBTが全ての競りにかけられる冷凍SBTに占める割合は、JMR時は0-6.5%であったのに対し、現在は34.7%としている。

日本による新しい推定値は、「築地市場における主要卸売業者5社からの聞き取り調査」（CCSBT-ESC/1208/31(Rev.1)）に基づくものである。

2014年7月4日に日本及びASBTIAが取りまとめ、合意したデータは、JMRの推定値及び公表データに合致しているが、日本によって使用されている修正レベルとは合致していない。これは、2014年7月4日は、市場を代表するように水産庁によって特別に選択された日ではあるものの、平常の築地の競りの実施日を代表するものではないためである可能性がある。妥当な説明としては、日本による修正推定値は、築地市場の競り業者から提供された情報の誤解に基づいている可能性がある。2005年及び2006年のJMR調査でもこれと同じ問題が明らかになっている。

勧告

データを明確化するための一つの方法は、築地の卸売業者5社からの助言に含まれている情報を精査することである。もう一つの方法は、東京都庁（TMG）ウェブサイト上の月別情報について、生鮮SBTでなされているように、冷凍SBTを輸入及び国産に分けることである。

耳石の追跡形質を用いたSBTの生息シグナルの特定：予備的研究からの洞察

要旨

SBTの空間動態に関する長い間の疑問は、夏期をオーストラリア大湾（GAB）摂餌海域で過ごす個体群におけるSBT若齢魚の割合である。耳石は、こうした回遊及び生息に関する情報を提供できる可能性がある。なぜなら、耳石は魚がその生活史を通して経験してきた環境条件のありのままの記録だからである。ここで我々は、幅広い海域のSBTの保管されている耳石を用いて、化学的に輪紋を特定することが可能かどうかを確認するための最初の予備実験について報告する。3海域（産卵海域、オーストラリア西岸及びオーストラリア大湾）のSBT若齢魚及び成魚（尾叉長44-166cm）25尾から採集された耳石について、laser ablation inductively coupled spectrometry (LA-ICP-MS) により元素（カルシウムCa、マグネシウムMg、ストロンチウムSr、リチウムLi、銅Cu、バリウムBa及び鉛Pb）濃度を測定した。各元素は、元素比の経時的変化を得るため、最初に形成された始原域と耳石の合間までの成長点に沿って連続的に測定された。全ての元素において循環変動が観察された。元素の濃度の変動は、生息地に特有のシグナルとして特定できるか、特に「GAB－夏期」のシグナルを他の「未成魚－夏期」の耳石輪紋を区別できるかどうかを確認するために分析された。

SRP Proposal:**SRP提案：耳石微量化学分析による年齢別の魚の空間分布の特定****要旨**

SBTの空間動態に関する長い間の疑問は、夏期をオーストラリア大湾（GAB）摂餌海域で過ごす個体群に占めるSBT若齢魚（2–5歳）の割合である。耳石は、こうした回遊及び生息に関する情報を提供できる可能性がある。なぜなら、耳石は魚がその生活史を通して経験してきた環境条件のありのままの記録だからである。

3海域（GAB、産卵海域及びオーストラリア西岸。Clearら、2014）から採集されたSBTの21の耳石の最初の解析では、耳石核と外側の隙間において、laser ablation transectsにより追跡元素濃度を探索した。本研究は、別の海域、別の年に採集された魚間で相当の差違が見られることを示唆した。

本技術の可能性を踏まえ、より包括的に空間・時間的にデザインされた多数の耳石の分析により、GABで夏期を過ごす若齢魚の平均割合、及び体系的な経年変化の範囲を定量化したい。

こうした研究の結果は、航空調査指数の解釈だけでなく、従来の標識計画に関連する混合範囲にかかる仮定の妥当性、及び将来のあらゆる標識計画に関連するものである。本提案は、CCSBTメンバーの間での共同プロジェクトの提案であり、ESCでのさらなる精緻化を求めるものである。分析のデザイン、耳石の準備及び微量化学及びデータ分析に関する貢献及びキャパシティ・ビルディングの機会となるものである。

CCSBT条約水域における韓国まぐろはえ縄漁業のSBT漁獲量及び漁獲努力量のレビュー

要旨

本文書は、1996年から2013年までのミナミマグロに関する韓国マグロはえ縄漁業の経年の更新／修正された漁獲量及び漁獲努力量を説明したものである。

1. はじめに

CCSBTの「データ交換要件」に従い、韓国はミナミマグロ（SBT）に関する韓国マグロはえ縄漁業にかかる漁獲量及び漁獲努力量データを提出してきた。2012年までは、韓国国内法（遠洋漁業開発法）は、操業の終了後30日（国内ベース）又は60日（国外ベース）以内にデータを提出するよう定めていた。このため、事務局へのデータ提出期限の時点では、データのカバー率が低かった。この問題に関して、データ提出期限を満たし、また収集したデータをレビューする機会を得るべく、データ収集システムを改善するために電子的フォーマットで毎月報告するよう、法律を改正し、データ提出期限を変更した。この措置は、韓国が近年のカバー率を100%に改善できるよう、2012年12月に発効した。

更新／修正された漁獲量及び漁獲努力量データは、ESC18会合からの要請に従い、2014年8月25日に事務局に再提出された。このため、本文書の目的は、韓国マグロはえ縄漁業のSBTに関する更新／修正された経年の漁獲量及び漁獲努力量のトレンドをレビューするとともに、変更されたデータについて詳述することである。

インドネシアみなみまぐろ漁業国別報告書2013

要旨

2013年9月から2014年4月までのベノアにおけるミナミマグロ（SBT）に関する漁獲モニタリング活動は、SBTの体長組成の幅が尾叉長70cmから225cmであったことを明らかにした。1998－2013年の間の定期的な体長測定では、2013年の平均サイズが尾叉長162cmに減少したことを示唆した。月別水揚げ量においてはこれまでの水揚げに比べて多く同様のパターンが見られ、これが国別漁獲量データの約93%を占めた。体長組成に関する一覧データでは、2013年12月には小型サイズ（120cm未満）の漁獲量が相当の割合であったことを示しており、このデータは、いくつかの漁船が産卵海域の外側で操業したことを示唆した。2013年のベノア港における稼働漁船数は、2011年及び2012年とほぼ同じであった。乗船オブザーバーはCCSBT許可船舶に170日間乗船し、最高緯度は南緯130であり、西経からは1130東であった。CDSデータは、2013年の推定総漁獲量について、尾数では18,005尾、重量では1,383トンを示している（DGCF、2014年、準備中）。

韓国SBT漁業にかかる2014年の年次国別報告書

1. はじめに

韓国はえ縄漁船は、CCSBT条約水域においてミナミマグロ *Thunnus maccoii* (SBT) 漁業に従事してきた。これらの漁業は、1957年にインド洋において、主にメバチ、キハダ及びビンナガを対象とした小規模な試験操業に始まり、1991年には対象種をSBTにシフトした。2013年は、韓国マグロはえ縄漁業の暦年のSBT漁獲量は918トン（漁期年では918トン）であり、9隻が稼働した。主に35°S–45°S、10°E–120°Eの海域において、特に西インド洋では4月から7/8月まで、東インド洋では7/8月から12月に操業される。近年は、韓国SBT漁業は、CCSBT保存管理措置の遵守のため、その漁獲量及び漁船隻数について韓国政府により厳しく管理されているところである。